

授受構文「XはYにAをくれた」における1人称とYの親近性について
An Affinity Between the First Person and Y in the Benefactive Construction
'X-wa Y-ni A-o kureta'

福盛 貴弘
FUKUMORI Takahiro

要旨

「XはYにAをくれた」という授受構文において、Yには、私あるいは私に近いウチの関係となる人が代入される。本稿の目的は、私に近いという関係性の実態を示すことである。アンケート調査で、32項目に対して、Yに代入できるのはどのような人であるかを答えてもらった。重回帰分析によって、プラスの説明変数は[友人]>[同胞]>[子]>[家族]>[下]の順となり、マイナスの説明変数は[上]となった。結果として、それぞれの素性に対する説明変数が、親近性の要因を示すこととなった。

Abstract

In the benefactive construction 'X-wa Y-ni A-o kureta', the first person or a familiar person for the first person is substituted for Y. The purpose of this paper is to show grammatically the familiar relationship with the first person. In a questionnaire survey, we asked to answer who is close to the first person among 32 items. The results of the multiple regression analysis are as follows. The positive explanatory variables are in the order of [my friend] > [my sibling] > [my child] > [my family] > [my inferior]. The positive explanatory variable is [my superior]. We conclude that explanatory variables for each distinctive feature show factors of the affinity.

1. 序

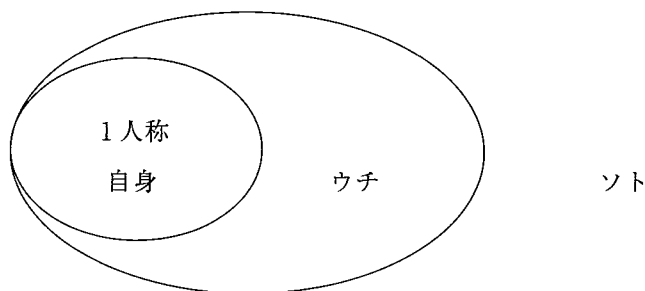
福盛 (2018) において、以下の調査を行なった。

- Q. 以下の例文の () の中に入る選択肢をすべて選びなさい。(1つでなくてもよい)
太郎が私の妹にプレゼントを () 。
a. あげた b. もらった c. くれた d. やった

回答者は249名（18～29歳）で、結果は以下の通りである。

a あげた	198/249 (79.5%)	b もらった	80/249 (32.1%)
c くれた	163/249 (65.5%)	d やった	73/249 (29.3%)

c「くれた」の回答結果は、妹を1人称に近しいと判断した人間が65.5%であったということである。換言すれば、妹を私に近しい人としてウチと捉え「くれる」が使える人と、他人扱いでソトと捉え「くれる」が使えない人がいることが確認できた。



そこで、妹以外の人間では1人称とどの程度近しいと判断するかが気になった。授受構文「XはYにAをくれた」において、Yが私あるいは私に近しい人なら適格な文となる。では、どこまで近しい関係なら許容されるのか。本研究の目的は、その実態を調査することである。

2. 調査方法

googleアンケートフォームを用いて、2018年6月9日より調査開始した。

<フェイスシート>

年齢：10代、20代、30代、40代、50代、60代以上

性別：男、女 ※必須ではない。

小学校の時に住んでいた都道府県：47都道府県、その他

※日本語母語話者であればどこに住んでいてもかまわない。

<調査項目>

太郎は千春にプレゼントをくれた。

・「太郎」は私（＝回答者）の友人である。では、「千春（ちはる）」は？

1. <理解できるかどうか> 以下の選択肢は、「私」との関係を示しています。その関係であれば、回答者自身が自然に理解することができる選択肢に✓をつけてください。（複数可）
2. <使えるかどうか> 以下の選択肢は、「私」との関係を示しています。その関係であれば、回答者自身が自然に使うことができる選択肢に✓をつけてください。（複数可）

私の母、私の妻、私の友人、私の幼なじみ、私の孫、私の上司、私の兄、私のおばさん、私の姉、私の先生、私の恩師、私が大ファンの歌手、私の部下、私のいところ、私の妹、私の友人の友人、私の父、私の親友、私の同僚、私のおじさん、私の恋人、私の弟、私の執事、私の知り合い、私の祖母、私の相棒、私の教え子、私が好きな歌手、私の子供、私の祖父、私の夫、私のご主人様 (提示順)

3. 結果

3.1 回答者の内訳

回答者数989名（2019年1月9日現在）の内訳は、以下の通りである。

<年齢>

10代：385、20代：421、30代：81、40代：58、50代：31、60代以上：13

<性別>

男：420、女：561、未回答：8

<都道府県別>

・都道府県コード順

北海道	10	埼玉県	299	岐阜県	2	鳥取県	2	佐賀県	7
青森県	11	千葉県	45	静岡県	23	島根県	3	長崎県	8
岩手県	9	東京都	125	愛知県	15	岡山県	13	熊本県	9
宮城県	3	神奈川県	49	三重県	4	広島県	12	大分県	3
秋田県	6	新潟県	30	滋賀県	2	山口県	5	宮崎県	7
山形県	14	富山県	5	京都府	3	徳島県	3	鹿児島県	3
福島県	28	石川県	1	大阪府	8	香川県	1	沖縄県	5
茨城県	51	福井県	3	兵庫県	11	愛媛県	7	その他	9
栃木県	27	山梨県	8	奈良県	3	高知県	3		
群馬県	39	長野県	21	和歌山県	3	福岡県	31		

3.2 回答結果

回答の結果を集計し、頻度が多い順に並べた表1と図1-1~2を示す。

4. 考察

4.1 位相差による親近性について

以下の考察では、それぞれの位相差による親近性を検討する。

表1 回答結果を多い順に並べたもの

項目	理解	使用	使-理	理解	使用	使-理
妹	722	704	-18	73.0%	71.2%	-1.8%
子供	643	619	-24	65.0%	62.6%	-2.4%
孫	534	523	-11	54.0%	52.9%	-1.1%
友人	512	466	-46	51.8%	47.1%	-4.7%
弟	485	492	7	49.0%	49.7%	0.7%
幼なじみ	459	413	-46	46.4%	41.8%	-4.7%
妻	457	418	-39	46.2%	42.3%	-3.9%
姉	430	379	-51	43.5%	38.3%	-5.2%
いとこ	421	375	-46	42.6%	37.9%	-4.7%
恋人	417	386	-31	42.2%	39.0%	-3.1%
親友	376	328	-48	38.0%	33.2%	-4.9%
教え子	342	304	-38	34.6%	30.7%	-3.8%
兄	325	286	-39	32.9%	28.9%	-3.9%
夫	302	290	-12	30.5%	29.3%	-1.2%
部下	291	239	-52	29.4%	24.2%	-5.3%
相棒	279	237	-42	28.2%	24.0%	-4.2%
母	277	260	-17	28.0%	26.3%	-1.7%
執事	226	174	-52	22.9%	17.6%	-5.3%
同僚	219	195	-24	22.1%	19.7%	-2.4%
父	206	179	-27	20.8%	18.1%	-2.7%
知り合い	167	167	0	16.9%	16.9%	0.0%
祖母	161	146	-15	16.3%	14.8%	-1.5%
祖父	152	131	-21	15.4%	13.2%	-2.1%
おばさん	148	116	-32	15.0%	11.7%	-3.2%
友人の友人	139	143	4	14.1%	14.5%	0.4%
おじさん	109	87	-22	11.0%	8.8%	-2.2%
大ファンの歌手	80	54	-26	8.1%	5.5%	-2.6%
好きな歌手	74	58	-16	7.5%	5.9%	-1.6%
先生	62	42	-20	6.3%	4.2%	-2.0%
恩師	61	35	-26	6.2%	3.5%	-2.6%
ご主人様	59	54	-5	6.0%	5.5%	-0.5%
上司	48	38	-10	4.9%	3.8%	-1.0%

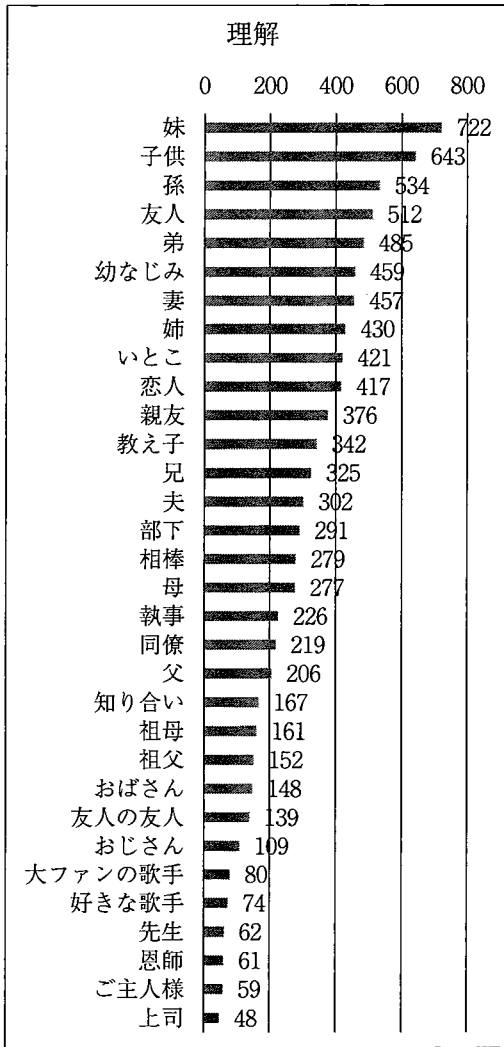


図1-1 理解できるという回答結果

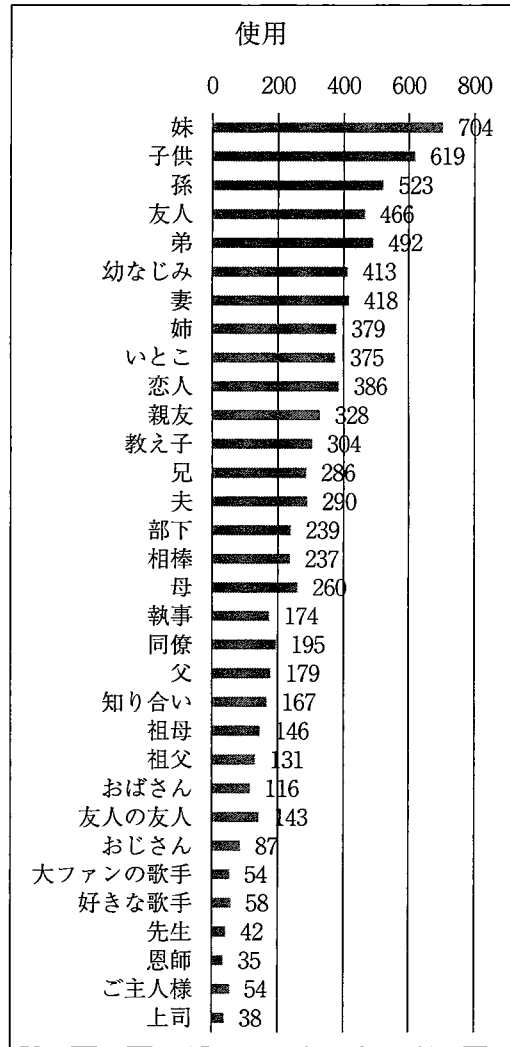


図1-2 使用できるという回答結果

4.1.1 男女差による親近性

全ての組み合わせについて、女性の方が近いという結果となった。表2に示す。

4.1.2 上下関係による親近性

全ての組み合わせにおいて、上の関係にあたる人の方が近しくないという結果となった。表3に示す。

4.1.3 他人との心的距離による親近性

他人との心的距離をふまえた結果を表4に示す。友人や幼なじみより親友の方が近しくない

表2 男女差による親近性

	順位	理解	使用		順位	理解	使用
妻	7位	46.2%	42.3%	母	17位	28.0%	26.3%
夫	14位	30.5%	29.3%	父	20位	20.8%	18.1%
姉	8位	43.5%	38.3%	祖母	22位	16.3%	14.8%
兄	13位	32.9%	28.9%	祖父	23位	15.4%	13.2%
妹	1位	73.0%	71.2%	おばさん	24位	15.0%	11.7%
弟	5位	49.0%	49.7%	おじさん	26位	11.0%	8.8%

表3 上下関係による親近性

	順位	理解	使用		順位	理解	使用
子供	2位	65.0%	62.6%	妹	1位	73.0%	71.2%
孫	3位	54.0%	52.9%	弟	5位	49.0%	49.7%
両親	(父+母) / 2	38.4%	35.8%	姉	8位	43.5%	38.3%
祖父母	(祖父+祖母) / 2	15.8%	14.0%	兄	13位	32.9%	28.9%
部下	15位	29.4%	24.2%	執事	18位	22.9%	17.6%
相棒	16位	28.2%	24.0%	ご主人様	31位	6.0%	5.5%
同僚	19位	22.1%	19.7%				
上司	32位	4.9%	3.8%				
教え子	12位	34.6%	30.7%	いとこ	9位	42.6%	37.9%
先生	29位	6.3%	4.2%	おばさん	24位	15.0%	11.7%
恩師	30位	6.2%	3.5%	おじさん	26位	11.0%	8.8%

のは疑問に残る。また、恋人は友人より近しくないという結果も気になる。ファンである度合いについては、下位同士であり、差があるとは言えない。

4.1.4 親等による親近性

親等による関係性よりも、下の関係にあたる人の方が近いという結果となった。表5に示す。

4.2 重回帰分析による親近

ここでは、紙幅の都合上、理解できると回答した頻度に基づき、重回帰分析を行ない、説明変数の値から私に近い人における要因を探っていくことにする。まずは、理解率をふまえて、1人称に近いとされるグループを(1)のように分類した。

表4 他人における心的距離による親近性

	順位	理解	使用		順位	理解	使用
友人	4位	51.8%	47.1%	大ファンの歌手	27位	8.1%	5.5%
幼なじみ	6位	46.4%	41.8%				
恋人	10位	42.2%	39.0%	好きな歌手	28位	7.5%	5.9%
親友	11位	38.0%	33.2%				
知り合い	21位	16.9%	16.9%				
友人の友人	25位	14.1%	14.5%				

表5 親等による親近性

	順位	理解	使用	親等	上下
妹	1位	73.0%	71.2%	2	下
子供	2位	65.0%	62.6%	1	下
孫	3位	54.0%	52.9%	2	下
弟	5位	49.0%	49.7%	2	下
妻	7位	46.2%	42.3%	0	同
姉	8位	43.5%	38.3%	2	上
いとこ	9位	42.6%	37.9%	4	同
兄	13位	32.9%	28.9%	2	上
夫	14位	30.5%	29.3%	0	同
母	17位	28.0%	26.3%	1	上
父	20位	20.8%	18.1%	1	上
祖母	22位	16.3%	14.8%	2	上
祖父	23位	15.4%	13.2%	2	上
おばさん	24位	15.0%	11.7%	3	上
おじさん	26位	11.0%	8.8%	3	上

- (1) a. {妹、弟} > b. {子供、孫} > c. {友人、幼なじみ、親友、いとこ、恋人} > d. {妻、夫} > e. {姉、兄} > f. {教え子、部下、執事} > g. {相棒、同僚} > h. {母、父}

次いで、それぞれのグループに対し、[上][下][家族][子][同胞][友人]という素性を設定した。素性表示は(2)に、素性による包含関係は(3)に、グループを区分する規則は(4)に示す。8グループを分類するための最少の素性は3であるが、以下の包含関係があるため、6の素性が必要となった。[上][下]は $2^2=4$ 通りだが、 \neg [+上][+下]なので3通

りとなる。[家族][子][同胞][友人]は、 $2^4=16$ 通りだが、(3)の条件のため5通りとなる。両者を組み合わせて6つの素性で弁別できるのは9通りである¹⁾。

(2) それぞれのグループにおける素性表示

a.	[-上][+下][+家族][-子][+同胞][-友人]	{妹、弟}
b.	[-上][+下][+家族][+子][-同胞][-友人]	{子供、孫}
c.	[-上][-下][-家族][-子][-同胞][+友人]	{友人、いとこ、恋人etc.}
d.	[-上][-下][+家族][-子][-同胞][-友人]	{妻、夫}
e.	[+上][-下][+家族][-子][+同胞][-友人]	{姉、兄}
f.	[-上][+下][-家族][-子][-同胞][-友人]	{教え子、部下、執事}
g.	[-上][-下][-家族][-子][-同胞][-友人]	{相棒、同僚}
h.	[+上][-下][+家族][-子][-同胞][-友人]	{母、父}

(3) 素性における包含関係

- ・[+上][+下]の組み合わせで、[+上][+下]はない。
 $[+上] \cap [+下] = \phi \rightarrow \neg [+上][+下]$
- ・[+子]かつ[+同胞]は、[+家族]に含まれ、[+子][+同胞]はない。
 $[+家族] \supset [+子] \wedge [+家族] \supset [+同胞] \wedge [+子] \cap [+同胞] = \phi \rightarrow \neg [+子][+同胞]$
- ・[+子]なら、[+下]である。 $[+子] \rightarrow [+下]$
- ・[+友人]は、[+家族]に含まれない。 $[+家族] \not\supset [+友人] \rightarrow \neg [+家族][+友人]$
- ・[+友人]なら、[-上][-下]である。 $[+友人] \rightarrow [-上][-下]$

(4) ランキングに対する規則²⁾

1. [+下][+家族]なら、[-子]>[+子] a>b
2. [-上]なら、[+下][+家族]>[-下][-家族] a, b>c, g
3. [-下]なら、[+友人]>[-友人] c>d, e, g, h
4. [+家族]なら、[-上]>[+上] a, b, d>e, h
5. [-子][-友人]なら、[+家族][+同胞]>[-家族][-同胞] e>f

1) 当初は、5つの素性 [上] [下] [家族] [親子] [友人] を用いて9通りの分類が可能であったが、後述する目的変数が適切な値とならなかったため、6つの素性を用いるにいたった。また、理解率20%未満のグループである、[-家族][+上]: {祖母、祖父} {おばさん、おじさん} {先生、恩師、ご主人様、上司}、[+友人]: {知り合い、友人の友人}、[-友人]: {大ファンの歌手、好きな歌手} を分類するためには、さらに素性を加える必要があるため、本稿での考察対象から除外した。

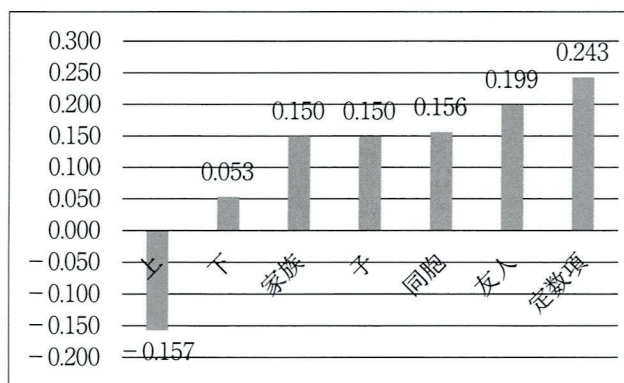
2) (4)については、8グループ間を区別するだけなら1~7の規則で成り立つが、理解率30%未満を除外するなら、[友人]ならびに5~7が不要となり、1.は[+下]なら[-子]>[+子]、2.は[-上]なら[+下]>[-下]、3.は[-下]なら[-家族]>[+家族]となる。

6. [-上][-家族][-友人]なら、[+下]>[-下] f>g
 7. [-子][-同胞][-友人]なら、[-上]>[+上] d, f, g>h

(2) をふまえて数量化I類に従い、素性からダミー変数を指定する。+を1、-を0として重回帰分析を行なった結果を、表6と図2に示す。計算結果から、それぞれの素性に対する説明変数が求められ、理解率の順位と目的変数の順位が一致した。また、補正R²から素性とグループには強い相関性があることが確認できた。そのことによって、[友人]>[同胞]>[家族]>[子]>[下]>[上]の順で、1人称との近しさが決定されることが明らかになった。

表6 重回帰分析による結果

	説明変数 理解率	上	下	家族	子	同胞	友人	目的 変数
		-0.157	0.053	0.150	0.150	0.156	0.199	
a	0.610	0	1	1	0	1	0	0.601
b	0.595	0	1	1	1	0	0	0.595
c	0.442	0	0	0	0	0	1	0.442
d	0.389	0	0	1	0	0	0	0.392
e	0.382	1	0	1	0	1	0	0.391
f	0.290	0	1	0	0	0	0	0.296
g	0.251	0	0	0	0	0	0	0.243
h	0.244	1	0	1	0	0	0	0.235



R²≒0.799、補正R²≒0.707、定数項=0.243、[友人]p<.01、
 [上][家族][同胞]p<.05、[子]p<.10

図2 重回帰分析によって得られた定数項と説明変数

5. 結語

1人称との親近性を、素性それぞれに対する説明変数で説明することを試みた。その結果、規範的な「くれる」の用法はすでに変容していることが示唆される。従って、本研究による実態をふまえた上で、現状の規範性から拡大した新たな規範のレベルを模索することが教育の現場では必要となってくるだろう。そうしなければ、特に青年層には教わったことと現実が乖離する懸念が生じる。参考までに、筆者の内省では、使用できるのはbとdしかないので、(5)のように規則は減る。

(5) 筆者の内省による規則

- | | |
|-------------------------|---------------|
| ① [+家族] でなければならない。 | a, b, d, e, h |
| ② [+上] は除外される。 | a, b, d |
| ③ [+下] なら、[+同胞] は除外される。 | b, d |

こういった点から、世代差によって、素性に対する説明変数が変わる（例えば、40代以上ならa群とb群の親近性が入れ替わるかも）ことが予測できる。また、地域差や性差といった位相の違いによっても変わるであろうことも予測できる。位相差によって説明変数が変わること、それぞれの属性に対する要因が浮き上がってくることになる。今後は、データ数を増やし、さらなる詳細な分析を重ねていくことが課題となる。

参考文献

福盛貴弘 (2018) 「授受動詞の判断のゆれについて—「私の妹」は身内か他人か—」『語学教育研究論叢』 35 : 25-38. 大東文化大学語学教育研究所

付記

本研究は、言語学勉強会 (2019/2/8、大東文化大学) ならびに現代日本語文法研究会 (2019/3/8、実践女子大学) における口頭発表をもとにしたものである。当日コメントをいただいた方々にお礼申し上げます。特に上村圭介氏には、重回帰分析による接近法をご教示いただき、深謝の意を申し上げます。